

(一) 価値形態と弁証法

E 君達は、よく、われわれの遺言を執行する、などと言っているが、今日はその手際を見届けにきたよ。

R そうですか。実は僕らも最近では討論する相手が少ないですから、ありがたいことです。

L では早速はじめたまえ。発言は手短かに、分かりやすく。

R 『資本論』初版、価値形態論をどう読むか、ということからはじめたいですね。

E おやおや、君達は僕の恥部の掘り起こしからはじめようというわけかい。仕方ないね。価値形態の俗流的理解の流布については、僕にも責任があるわけだから。

R 物象化と物化との区別という問題は前提にして、今回は価値形態の弁証法について話題にしたいですね。

L ほほう、君達は僕が『哲学ノート』で提起しておいた遺言を執行しようとするのかね。

E そういえば、イリイチ(レーニン)の弁証法の理解では、僕も商品論がわかっていない人にはいるのだったね(注1)。

R そうですね。エンゲルスさんの場合、弁証法は主として発展法則という見地から問題にされていますが、レーニンさんはヘーゲルの論理学に当たってみて、それではまずいと考えたのでしたね。弁証法の核心が対立物の統一にある、というノートでの提起(注2)は、矛盾を構造的につかもうとしたのでしょね。

L こちらでヘーゲルと討論してみたのだが、どうもあの理解では、まだもう一つだったと反省しているんだ。

R それを聞いて大いに力づきます。実は僕らも、対立物の統一という見地からでは価値形態の弁証法は解けないのではないかと考えてきたのです。

M 価値形態の弁証法は、いうまでもなく、反照の弁証法さ。

(二) 反照の弁証法

E その反照の弁証法というやつは今もよくわからないのだよ。何度かヘーゲルに聞いてみたんだけどね。

R いま20エレのリンネルが一枚の上着に等しい、という簡単な価値形態を想定しますと、リンネルの価値が上着の使用価値で表されていること、つまり使用価値がその反対物である価値の現象形態となっていることが知られますが、この事態が反照ということでしょう。

M 僕の著作からの文字どおりの引用じゃあ困るね。

R そういわれると難しいのですが、例示を試みることにしましょう。あなたが上着の使用価値を価値鏡と見ている点がよくわからなかったのです。ついガラスの鏡を思い浮かべますが、それじゃダメなんでしょう。

E 思想史からみれば、人間関係を鏡との比喻で論じるというのは、ヘーゲルの頃流行していたのさ。モール(マルクス)もスミスの『道徳感情論』は読んでいたね。

R ガラスの鏡だと、自分の姿が写し出されますが、価値鏡の場合、上着物質がリンネル価値の写像だ、ということでしょう。20エレのリンネルだと一枚の上着があらわれ、40エレのリンネルだと二枚の上着があらわれる、というように。

M フムフム。

E モールが言ったように、価値表現は超感覚的だから、写像も、自分の顔が写るといふようにはならないのだね。

R こう考えると、上着が自らの使用価値で、リンネルの価値を照り返している、つまり使用価値が価値を反射している、ということがよくわかるのです。

M じゃあ価値の方は何を参照しているのかい。

R 使用価値が価値を参照するということはわかったのですが、価値が使用価値を参照するという方は、正直いって、もう一つはっきりしないのです。

M 君ね、僕の本を書いているところをもう一度読んでごらん。

R 初版二〇頁でしたね。そこにはこう書いてあります。

「使用価値あるいは商品体は、ここでは一つの新しい役割を演じるのである。それは商品価値の、つまりそれ自身の反対物の現象形態となる。同様に、使用価値に含まれている具体的有用労働が、それ自身の反対物に、すなわち、抽象的人間的労働の単なる実現形態となる。商品の対立的な二規定は、ここでは、互いに分かれるのではなくて、互いに参照しあうのである。」

あっそうか。使用価値が価値を参照しているということの裏に、価値が使用価値を参照するということがあるわけですね。

(三) 鏡の比喩と形態規定

E 参照の弁証法がむつかしいのは、例えば個人Aと個人Bとの間の関係(注3)とか、ヘーゲルの言う二つの自己意識の関係(注4)とかを想定するとすれば、そこで鏡の役割を果たす側が、この関係においては新たな形態規定を受け取る、ということなんだね。

M ヘーゲルは事実上形態規定を展開していながらも、自覚的にそうはしていないから、フレッド(エンゲルス)が参照の弁証法についてヘーゲルに聞いても不可解だと思うよ。

E そういえばヘーゲルは、実体=主体だから、自己意識論においても相互承認がどうしても展開できなかったわけだ。モールなら、あそこで一方の自己意識Bの担い手が個人でありながら、対立している個人Aの自己意識を写し出す鏡の役割をはたし、この役割においては個人Bの身体そのものが類の単なる実現形態となっている、というのだろうね。

M 『精神の現象学』は、若い頃検討しただけだから、忘れてしまったよ。

R 話を『資本論』にもどしますと、上着が価値鏡となっていること、そこに参照の構造がある、という理解でいいんでしょうね。

L ヘーゲル論理学との関連でいえば、本質論をひっくり返すということだな。

R 『大論理学』の本質論でヘーゲルは参照(反省あるいは反射とも訳される)を詳しく説いているのですが、あそこは難解ですね。

E ヘーゲル研究者であそこが理解できている人はいないさ。

M ヘーゲルは形態規定に純化してはいないから、形態規定で進んでいって論理が行き詰まったとき、実体=主体ということ、つまりは内容にもどって論理を組み立てている、と考えれば、本質論の構造は見透かせるさ。

R そうすると、本質論での参照の弁証法をひっくり返す、という場合、弁証法の運動の契機を、ヘーゲルが逃げて内容に求めている点を批判して、あくまで形式に求める、ということになるのでしょうか。

L ぼくはいま、古いノートの本質論のところを読み返してみたが、あの時点で参照の弁証法を把握できていなかった、ということは明白だね。あの時はきっと、ヘーゲル流の非合理的な参照論に反発を感じていたのだと思う。

それはさておき、ぼくは形式に純化するといったことで、転倒が可能になるとは考えないね。

R じゃあ、価値形態論のなかみに入っていきますよ。

(四) 価値形態の論理

R ぼくらは初版の価値形態論の意義は、簡単な価値形態の分析で、「それはそれ自身の価値存在を、さしあたりはまず、自分に等しいものとしての他の一つの商品、上着に連関することによって、示すのである」と述べている点にあると考えているのですが。

E ぼくは、あの手紙（注5）のことがあるから、とりあえずは発言をひかえるよ。

R つまり二〇エレのリンネル＝一枚の上着、という商品の価値形態において、この形態それ自体の意味する内容が、同じ質のものどうしの関係ということであり、この同じ質とは抽象的人間労働だ、ということがそこで表現されているということでしょう。

L ぼくも交換の歴史的過程の解明という問題意識で読むことが多かったから、価値形態の論理それ自体はつめて考えなかったね。

R こういうふうにと考えると、等価形態に立たされている一枚の上着という使用価値自体が、新たな経済的形態規定を受け取っている、ということもよくわかると思うのです。

M 形態規定については宇野弘蔵君も強調していたようだが、君たちもそれに影響されたのかい。

R 彼の場合、あなたとは全然違う意味です。例えば、商品、貨幣、資本を「流通形態」として規定することが形態規定だ、というほどのことです。そうではなくて、上着の使用価値が、それとは別の本質の現象形態となっている、ということが、形態規定ということの意味でしょう。

E そういえば廣松渉君が、一そうそう、廣松君といえば、ぼくは彼には感謝しなければならないんだが（注6）一彼が最近やっている役割理論の取り込みなんかも形態規定と関係があるのかい。

R 廣松さんの場合、形態規定を純粹に取り出せなかったから、役割理論に興味を持つようになったのではないのでしょうか。

L 西部なんかは論外としても、六〇年第一次ブントの指導者だった人たちの最近の言動にはあきれることが多いね。

E そういう人たちだけでなく、最近の若手の社会科学研究者の書くものも無茶苦茶なのが多いよ。

M 無知が役に立ったためしはない、ということかい。

L 階級が成熟して資本物神が完成した、という君らの一連の判断についてぼくは保留しているが、しかし事態はその証明としての意義を持っているかも知れないね。

R ぼくらは、いわゆるインテリゲンチヤの知的生産物が、全く馬鹿馬鹿しいものになってきている、というところにも、『資本論』の核心が、大衆的に理解される時代の到来を感じとっています。

L そういう弁証法はぼくも大好きだ。そうすると君らはモールが書いたあと、百年かかっても誰も解読できなかった価値形態の論理を、大衆が理解する時代がきた、と見ているわけだね。

E ぼくの失敗が救済される時代がくるといえるのかい。

R 話がそれたついでにいいますと、価値形態の論理自体は、例えば言語論や精神医学や心理学の流行というかたちで外化されているとぼくは考えています。ただしインテリゲンチヤの論説は、物象化にもとづく物象による人格の意志支配との対決をあいまいにしたところで、というより、その事実すら知らずに、たてられていますから、みな的是はずれです。こうした事態は、今日の労働者大衆の運動が、従来のような「戦闘性」を失ってきている（＝階級が成熟している）ことの反映でもあるでしょう。

しかし労働者大衆のなかに目覚めた人たちはいますし、彼らは物象による意志支配と対決せざるを得ませんから、価値形態の論理が眼に見えていると思うのです。

M 本当のところを言えば、物象による意志支配の様式の暴露が、あの本の核心さ。

（五） 観念論的転倒

R 価値形態の論理に戻りましょう。上着が新たな形態規定を受け取る、というとき、それは使用価値を作る労働が、価値の実体である抽象的人間労働の単なる実現形態となっている、ということでした。そしてこのようになることが反照の作用でしたね。

- E 商品生産者たちの社会的関係を、労働の反照関係として解説しようと言うわけだね。
- R そこででてくる問題が、価値形態の論理における観念論的転倒ですね。
- L 諸物を考える場合、一般的なものとは抽象の産物であって個物としては存在せず、諸物の総括としてあるだけなのに、価値形態では、個物としてある、つまり使用価値としてあるのは、価値という一般的なものが実在するための仮の姿となっている、という逆転のことだね。
- E この転倒は貨幣で説明すると分かりやすい。貨幣にあっては一般的なものが金という個物として存在しているので、モールは動物なるものが、トラやウサギと同様の個物として生きているようなものだと述べていたけれど（注7）、日本でこの問題に気づいて注意を促したのは牧野紀之君でしたね（注8）。
- R この商品、貨幣の観念論的存在構造が観念論の土台をなしている、ということはわりあい認められるようになっていますが、ぼくらは物象による意志支配を考慮にいれなければならないと考えています。
- L そうだね。商品、貨幣の観念論的な存在構造に観念論の土台を見る、というのでは単なる反映論だ。これは自己批判だが、反映論を克服するにはやはり物象による意志支配を研究することが必要だね。ロシア語ではディング（物）もザッへ（物象）も同じ言葉になるので、ぼくもはじめの頃は、物象化を物化と受けとめていたが。
- R 物象による意志支配の問題はあとでやります。価値形態の論理における観念論的転倒は、価値表現の理解を難しくしている、ということですが、しかし他方で今日この論理が社会的意識となって大衆化していて、それがインテリゲンチヤによってロゴス中心主義批判（ポスト構造主義）などの諸説として氾濫させられているわけです。しかし、インテリゲンチヤと違って、大衆の場合、論理の転倒は生活そのものに根ざしたものですから、そこには価値形態の論理を把握しうる現実性が内在している、とぼくらは考えています。
- E そうい話を聞くと、ルカーチの階級意識を思い出してしまうが、その種の実践上の問題は体系化する必要はない、というのがぼくの忠告だよ。
- L 政治的扇動として具体化したまえ。

（六） 価値形態と物象化

- R ひきつづき価値形態の論理を見ていきます。
- 価値形態の秘密とは何か、という問題に移りますが、これは通常、使用価値で価値が表現されること、というように理解され、最善の解釈でも、使用価値上着が価値の単なる実現形態となっているということを確認することにとどまっているのですが、しかし、この上着が価値鏡となっているということが、相互に独立した私的諸労働の反照関係にもとづくことを理解しなければ、本当にその秘密を暴露したということにはならないと考えます。
- E 価値形態の秘密と謎との混同については武田信照君が指摘していたが（注9）、あれは面白かったよ。あそこを出発点にすれば、宇野・久留間論争の総括も可能となるね。
- M 宇野君の場合は論外として、久留間君の場合、ぼくの著作の芸術的一体性ということを考えていないのは問題だよ。
- L 第二章交換過程論は、ほとんど変更されてはいないので、初本文価値形態論との関連で研究されねばならないのに、宇野君も久留間君も現行版にもとづいて議論するという間のぬけたことをやらかしたわけだね。
- M 先日宇野君と話したが、彼はやっぱり現象学に影響されたといっていたよ。
- E 分析によって価値実体を取りだすのは誤りで、現象に則して叙述するべきだ、というかの発想だな。
- R 価値形態の秘密が先に述べたことであるのに比べ、その謎というのは等価形態の謎性と関係しているとぼくらは考え、前者を物象化の原理、後者を物神性の秘密と理解したのですが。
- L 物象化と物化の区別という問題は、政治理論の形成にとって重要だと思うね。ぼくは若

い頃に物象化を物化と受け取り、経済過程を意識的行為とは考えなかったが、この点は『唯物論と経験批判論』を書かねばならなかったとき、哲学上の反映論の限界を突破できなかったことの根拠となっていたわけだ。しかしよく考えてみると、社会関係にあっては、無意識的行為も、実は意識に媒介されている。

E 経済過程は意識から独立しているのではなくて、意志から独立しているのだね。

M 社会関係における無意識的行為の分析は、ぼくが秘かに誇っているものさ。

E 通常、無意識についての理論はフロイトが創始者と見られているけどね。

R ぼくらは『資本論』の物象化論が、実は社会関係における無意識的行為の分析でもあることに最近やっと気づいたのです。

M 貨幣生成のところだね。

(七) 貨幣生成における社会的共同行為

R 初版本文価値形態論には一般的価値形態のあと、第四形態がおかれています。これは全ての商品所有者が、自分の商品を一般的等価物にしようと考えている場合を念頭におけばよいと思うのですが、この第四形態では貨幣も成立しないし、その結果、商品も成立しないのです。

交換過程論では、この第四形態を受けて、商品所有者たちが当惑して考え込むところがでてきて、そのあと「はじめに行為ありき」ということで、商品所有者たちの本能的な社会的共同行為による貨幣の生成が説かれています。

M もっと詳しく述べてみないかい。

R 相互に独立した私的諸労働の反照関係に商品所有者たちが順応して労働生産物の商品形態が生じているとき、この物象の社会的関係としての商品世界を分析することが価値形態論の課題であったわけですね。

そこでは商品があたかも人格のように意志と意識を持った主体としてあらわれて、諸商品が社会的に妥当な価値形態を作りだそうと努力するわけです。そして簡単な価値形態から出発して、一般的価値形態に到達し、諸商品が相互に価値としてあらわれることが出来る形態を見いだしたのですが、しかし、それは第四形態で否定されてしまうのですね。

つまり、物象の世界だけでは貨幣形態形成の必然性は明らかになっても、その現実性は解けないのですね。そこで通常は、交換過程での商品交換によってその現実性が解けると理解されているのですが、そうではないのですね。現実性は商品交換にあるのではなくて、商品交換に際して、物象たる商品が商品所有者の意志と意識を支配して社会的共同行為をとらせること（物象の人格化）にあると見るべきでしょう。

M なるほど。その先はどうなるのかい。

R 貨幣は諸商品の交換過程の必然的な産物であるわけですが、貨幣が発生するのは、商品が交換過程に直面している商品所有者の意志を支配して共同行為をとらせることによってであって、交換行為そのものではないのですね。

このことがわかると、貨幣の発生は、商品所有者の社会的な共同行為を必要とする、といっても、この行為は無意識になされる本能的なものですから、当の商品所有者たちにとっては、貨幣は自然に自立的にあるように見える、ということもはっきりしてきます。

L その物象による意志支配論は面白いね。ぼくは政治の領域では大衆が社会構成体の運動に順応しているという事実をリアルに評価しておかねばならないと常々考えていて、そこで大衆蔑視だといった非難をあびせかけられることも多かったのだが、意志の自由が物象による意志支配をともなっていることがわかれば、この非難が当たらないことは明白だね。

E その貨幣の生成は、諸商品が相互に価値としてあらわれあうことが出来る、諸商品の社会的に妥当な形態の成立ということでもあるから、市民社会の成立ということでもある、ということになるね。そうなるるとぼくの国家論、あれは気になっていたのだけれど、見直すこ

とが可能になるなあ。

R あなたの国家論の総括についてはぜひ機会を改めてお聞きしたいと思います。

先に進みますと、この無意識のうちになされた社会的共同行為によって生成された貨幣という物象が、今度は貨幣蓄蔵の衝動をもつに到ります。貨幣は私的労働の産物でありながら、その私的労働が社会的労働の実現形態となっていて、社会的労働の化身です。

この社会的労働の化身を私物にすることが出来ますから、貨幣蓄蔵によって、より多くの社会的労働を支配しようという衝動がそこに生まれ、貨幣所有者の意志を支配します。

貨幣がもつこの致富衝動が、貨幣蓄蔵ではなく、資本の生産過程によって実現されるようになると、それは、資本の致富衝動へと発展します。この資本の致富衝動が資本家の意志と意識を支配して資本が人格化している社会、これが今日の資本主義社会ということでしたね。

M あの方の方は大分はしよったようだけど、大筋ではいいと思うね。

(八) 物象化と階級意識

R それで、資本における人格の物象化過程と物象の人格化過程については説明を省きまして、結論だけを述べましょう。

賃労働者が自らの労働力を可変資本に転化させられ、自らの人格的力を資本へと物象化させられます。他方、資本は資本家の意志と意識を支配して人格化します。

資本家による労働者に対する支配は、この物象の関係によって媒介されていますから、その支配は、労働者の労働力が資本に物象化されていることを根拠にして、労働者の意志を資本家が領有していることとしてあります。これが労働者の経済的服従ということなんですね。

M ぼくは労働力の物象化とはいっていない。

R そこは検討を要するとは思いますが、物象化のこのような捉え方からすれば、労働者階級の階級意識の形成の問題も、自覚の論理や、政治的民主主義の拡大や、自主管理（経済的民主主義）、といった従来の路線では行き詰まらざるを得ない、ということになると思います。

E 第二インターナショナルの失敗にぼくは責任をとらなければならないのだが、結局、モールが書いている、資本主義的生産が発展するにつれ、労働者の資本への経済的服従が強まる、ということのをわれわれは本当にはわかっていなかったのだろうね。

カウッキーは資本主義が発展すれば危機が生じて社会主義が不可避となる、と考えていたし、ベルンシュタインは、この服従の強化過程を社会主義への道だと錯覚していたわけだ。もちろん、この服従の強化過程は、同時に労働組合の諸権利の拡大と労働者政党の発達の過程でもあったから、この錯覚の方は大衆化する余地があり、げんに修正主義の方が多数派となったわけだが。

L ぼくはコミンテルンの会合で『何をなすべきか』で提起した組織論は西欧では通用しない、としばしば述べたが、しかし物象化論をふまえれば、自然発生性と目的意識性についての提起は、むしろ新たに強調されねばならないと思うね。

R ぼくらはいま、最大限綱領の内容で大衆的な諸運動が形成されているし、それらの運動を発展させねばならないと考えています。

E モールが、『ゴータ綱領批判』に書いたのも、そのことに関連していたね。民主主義的要求を中心とした最小限綱領でしか大衆運動が組織できない、という発想が伝統化したことにはイリイチにも責任があるんじゃない。

L 『二つの戦術』は民主主義革命における共産主義者の任務を説いたもので、この理論は『四月テーゼ』で総括している。ただ後になって民主主義革命から社会主義革命へという二段階路線がコミンテルンで定式化されたのはネップの影響でしょうね。戦時共産主義の時期の急速な社会主義化の自己批判が、『四月テーゼ』の否定と『二つの戦術』の復権として、ネップ以降にスターリンらに受け取られたのであろう。

R そういえば、五〇年代には『四月テーゼ』は党内では禁書で、共産党の神話を打ち破っ

たブントは、『四月テーゼ』の復権だけで急成長したようなところがありました。

E 最大限綱領で大衆運動を組織する、ということはぼくらの念願だった。パリ・コミューンはすでにそうだった。その敗北は運動主体が最小限綱領しか意識できていなかったところにあったといえよう。

R 最大限綱領、つまり社会革命の要求で大衆運動が起きるなどとは信じられない、大衆運動の路線は徹底した民主主義の要求以外にはない、と考えている活動家が、いまでも結構多いのですが。

L そのような人々は、ぼくが徹底した民主主義の要求を、政治権力奪取後の運動の展望の問題として述べたことを忘れているのさ。社・共、いわゆる既成左翼は最小限綱領でしか大衆運動を提起しないが、その運動を左へ向けるために徹底した民主主義を対置しようというんだらうね。第四インターならともかく、ブントにもそんな発想があったのかい。

R 関西ブントの政治過程論というのがそうでした。しかしぼくらは六〇年代末にその克服を課題としてきました。いまから考えると、社会革命の要求で大衆運動を組織し、その運動でもって国家権力を打倒し、プロレタリアートの独裁を実現する、という路線の確立が、この課題への回答になると思います。

L 最大限綱領を要求する大衆運動は当然にも、最小限綱領を要求して闘われてきた従来の大衆運動とは、その展開も、発展法則も異なるだらうね。

R すでに時代はオルグの時代に入っている、というのがぼくらの認識です。全世界のいたるところから、一斉に社会革命の要求に基づく大衆運動が展開される前段階にある。

M・E・L われわれを扇動してもしょうがないよ。

(九) 社会革命の展望

E せっかくだから、君たちの社会革命の運動の展望を聞こうじゃないか。最大限綱領を要求して大衆運動を組織しようという意図はわかったが、しかしそれは具体的にはどんな要求になるのだろうか。

R とりあえず、商品、貨幣、資本、の廃止ということができます。

L そういう事柄では全然政治的扇動にはならないね。

R 階級の廃止ということの具体的内容として述べたつもりなのですが。

L 階級の廃止、というスローガンも、一般的すぎやしないかい。

R あるスローガンが適切かどうか、という問題を判定するためには、スローガンの方だけでなく、運動主体の方をも考慮する必要があるでしょう。

L ウーム。ひょっとして、ぼくはまだ、最小限綱領を要求した旧来の大衆運動における運動主体を念頭においていたのかも知れない。

E かといって、ぼくにはどうしても、エコロジーとか反原発とか、自然食のための共同購入だとか、プロレタリア階級による組織的闘争だとは考えられないのだよ。あれはアナキストの運動さ。モールはどう思う。

M ねえフレッド、ぼくらが一八四八年にプロレタリアートの階級闘争だと述べた当時の闘争の主要な担い手がプロレタリアートではなかったことを、良知力さんたちが明らかにしたのを知っているだらう。要は闘争の担い手の問題ではなくて、闘争の理念の問題さ。

E アナキストに批判的なぼくとしては、君らの論議にもアナキズムのにおいを感じるね。

R 社会革命の要求で大衆運動を組織するというと、昔の活動家たちはすぐ、一体政治権力との闘争はどうなるんだ、といって反発するのですが、ぼくらは政治権力との直接的対決しか念頭にない人たちの方が、国家の破壊と自由連合を夢みたアナキストたちの轍を踏んでいると思います。政治権力を打倒するための闘争に決起するには迂回が必要だ、ということは、あなたの方が、ヴィリッヒ・シャッパーたちを批判したときの見解じゃなかったですか。

E 政治権力との闘争を自己目的化したアナキストも居たが、他方ではコミューン作り

に向かったアナキストも居たのさ。ぼくは今日の大衆運動は政治運動を否定している、という意味でアナキーではないかと思っているさ。

R アナキストが運動に参加していたり、あるいは思想的なヘゲモニーをとっていたりすることを否定しませんが、しかしそのことと、大衆運動の性格がどうであるかということとは別問題でしょう。『哲学の貧困』には「社会運動は政治運動を拒否する、などと考えるのはならない。同時に社会運動ではない政治運動などというものは、断じて存在しない」と述べられています。今日の大衆運動は政治的性格をもっていますが、それは旧来の最小限綱領主義の政治家の眼には政治とは見えない、ということではないでしょうか。

E じゃあ話を転ずるが、社会革命の要求を掲げて大衆運動を展開しようとする場合、ひと昔前の構造改革派のやったようなことになるのじゃないのかい。

R 構造改革派が目指したものは実際は民主化の実現でした。彼らにあっては民主主義とは社会主義への途にほかなりませんでしたから、民主主義的改良が即社会革命の土台として位置づけられていたのです。彼らが掲げていた諸要求は、商品、貨幣、資本、の廃止とは全く関連していなかったのです。

L 要するに君たちの主張では、商品、貨幣、資本、の廃止といったスローガンを抽象的、一般的なものとしてではなく、具体的な実践の指針として受けとめるような運動主体が登場してきている、ということかい。

R そうですね。ぼくらは今日の段階では、手ごたえを感じている、としか言いようがありませんが。

M それで価値形態の弁証法の謎とかが試みられているわけかい。

R ぼくらは今日の大衆運動は社会革命の要求に基づいているけれども、しかし自然発生的にそうなっているだけだ、と考えています。それは活動家たちが商品の価値を批判できずに使用価値の面からしか批判しないところにあらわれています。ところが使用価値は多様ですから、使用価値の面からの批判では運動は必然的に分散、対立せざるをえません。

L そうすると、今日の大衆運動の自然発生性と闘うための共産主義者の意識性は、とりあえずは価値の批判から始まる、というわけだね。

R 実際、今日の大衆運動は使用価値の面からの批判から出発しつつも、労働生産物を商品とする事によって、それを社会に通用するようにするシステム（商品経済）や、労働力を資本へと物象化して、生産物を自らを支配する力として生産し、そうすることによって生産手段の所有者たる他人（資本家）に自分の意志を領有されるシステム（資本制的生産）はいやだ、という意識を強めてきています。

L つまりは市民社会批判ということだね。

R 階級の成熟という事態は、労働者階級が市民意識をもつ時代を到来させました。最小限綱領は、要はより完全な市民社会を要求するものですから、労働者が市民意識をもつに到った段階では、その種の要求をもとにした大衆運動が魅力を失っていくのは必然的でしょう。

E それは説得力があるね。

R ところが市民社会批判を掲げて大衆運動を提起しようという努力は、いままで政党の側からはなされていなかったのです。にもかかわらず大衆運動の側では市民社会批判が準備されつつあります。

L 一体どんなものかい。

R 例えば、市民社会の原理ともいべきものは、個々人はエゴを追求する、社会全体はエゴが相殺されて均衡する、そこでなお残る問題は国家の行政にゆだねる、といったもので、これは社会的生産が資本家の私事として営まれ、競争によって社会的生産におけるバランスを保っているような社会にふさわしい意識形態でした。

ところがこうした市民意識にどっぷりつかって生活していったよいか、という反省が、大衆運動のエネルギーに転化してきているのです。

M それは大変なことだ。

マルクスが大声で何か言いかけたとき、目がさめた。真夏の夜の夢のなかでの対話はこれで終わってしまった。

注1 「ヘーゲルの論理学全体をよく研究せず理解しないではマルクスの資本論、とくにその第一章を完全に理解することはできない。したがって、マルクス主義者のうちだれひとり、半世紀もたつのに、マルクスを理解しなかった」。(『レーニン全集』三八巻、一五〇～一頁)

注2 前掲書、一九一頁。

注3 『資本論』河出書房新社版、五〇頁。

注4 『精神の現象学』岩波書店版、一八四頁。

注5 エンゲルス一八六七年六月一六日付手紙。

注6 廣松渉『エンゲルス論』盛田書店。

注7 『資本論』初版、原典二七頁。

注8 さしあたり『初版資本論第一章』鶏鳴出版、一八七頁。

注9 『価値形態と貨幣』梓出版、一九六頁。

(一九八九年四月)